

# 適正施設ガイドライン

【リュウキュウヤマガメ *Geoemyda japonica*】

2020年9月

公益社団法人日本動物園水族館協会

## 種の概況

沖縄島北部、久米島、渡嘉敷島に分布する。発達した二次林や、より自然度の高い山地に生息し、湿った場所を好む。環境の改変などによる生息地の減少、道路設置による轢殺個体の増加や生息地の分断、密猟などにより個体数は減少しつつあると考えられている。他種との交雑個体の例もあることから、遺伝子の攪乱なども心配されている。

背甲長は成体で普通約 15 cm。背甲は細長いドーム形をしており、3本のキールがあり、後縁は鋸歯状になっている。体色は基本的には褐色であるが、赤みが強いなど個体差がある。本種に近縁なスペングラーヤマガメ *Geoemyda spengleri* との主な区別点としては、本種には腋下甲板があることが挙げられる。

## 1 飼育環境

### 1-1 ケージ面積等

基本的には水場を設置したテラリウムで飼育する。

繁殖期以外は雌雄別で飼育することが望ましい。

背甲長 15 cm くらいの成体を 1 頭で飼育の場合（ペアリングなど一時的な状況であれば 2 頭）、最低でも 40×70×30 cm 以上の容器を用いた方がよい。なお、リュウキュウヤマガメは立体的な活動も得意なため、ケージの高さは甲長の 2 倍以上あることが望ましい。高さを取れない場合はワイヤーメッシュ等で蓋をする。

複数頭飼育の場合は頭数に応じて床面積を広くする。また、ケージのコーナー部分に複数個体集まり重なることも想定し、逸走防止のためケージの高さや蓋の設置にも注意する。

### 1-2 陸場

陸棲のカメであるため、飼育ケージにおける陸場の割合は総面積の 7～8 割はあることが望ましい。上記のケージ面積であれば、40×50cm 以上ということになる。

### 1-3 床材等

ヤシガラ土、腐葉土などを使用する。落ち葉やヤシガラチップなどを加えるのも良い。土に潜る性質もあるので、深さは 5 cm 以上あるほうが良い。乾燥しすぎないように、霧吹きなどで適宜散水する。また、本来は強い日差しの下で活動するカメではないため、植栽や樹皮、人工物等でシェルターとなる場所を作る。

新規個体の検疫や餌付きの確認時などは、短期間であれば上記の容器に薄く水を張っただけの簡易的なケージも使用できる。

### 1-4 水場

カメが潜ることができる水場があるとよい。溺れる可能性もあるため、水深は甲高より少し深いくらいまでにするのが無難である。なお、水場には足場となる石などを設置するのが望ましいが、水中にカメが入り込める隙間などがあると嵌って溺死する可能性があるため注意する。

### 1-5 温度・室温

生息地の一つである沖縄島北部（名護）の気温を参考にした場合、夏季で最高 32℃ 近くまで上がり、冬季で最低 13℃ くらいまで下がるため、飼育下でも年間を通して季節変化をつける。実際にカメが活動しているのは林床のため、飼育下では上記ほどの温度幅は必要ないだろう。しかし、繁殖という面では冬季（だいたい 11 月から翌年 3 月頃）のクーリングは重要であると考えられる。しかしながらクーリングについては、一般的な爬虫類飼育施設において 15℃ を下回らないように室温を維持するのは難しいとおもわれる。低温の部屋にて加温を行うなど、ケージの置き場所を工夫する必要があるだろう。

#### 1-6 湿度

定期的にミストなどで散水し、乾燥させ過ぎないようにする。特に、幼体時は乾燥させすぎると甲羅の成長不良などを招く恐れがあるため注意が必要。

野生個体は雨上がりなどに活動的になるため、給餌前の散水が効果的である。

#### 1-7 照明

昼間に明るくするための一般照明、爬虫類用紫外線灯、スポットライトなどを併用する。リュウキュウヤマガメは森林生活をするので、明るすぎず、紫外線も強過ぎないものを使用する。室温がカメの活動温度であればスポットライトは無くても飼育は可能だが、季節変化などにメリハリを持たせるという面ではあったほうが良い。

点灯時間は、沖縄島北部の日照時間を参考にタイマー設定するなど、季節変化を持たせると良い。なお、冬季にクーリングさせる場合などは、スポットライトは使用しなくてもよい。

#### 参考資料

沖縄県天然記念物調査シリーズ第 41 集リュウキュウヤマガメ・セマルハコガメ生息実態調査報告書 平成 15 年 3 月沖縄県教育委員会

改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第 3 版 動物編 レッドデータ沖縄 沖縄県